

無住禪師一圓伝歴考

伊藤真徹

無住一円の伝記としては、「延宝伝燈録」、「本朝高僧伝」中に収められている。しかし師蛮が「延宝伝燈録」を著したのは、延宝六年(1696)であり、「本朝高僧伝」(以下高僧伝と略称する)が成立したのは、元禄十五年(1708)であつて、共に禪師の寂後三百六十乃至九十年後に相当している。師蛮は高僧伝に登載した禪師の記事については、「余三十年前、兩次往長母寺、尋無住之事、又考其述作中、以備今之撰」と述べているので、禪師の自記と古老の伝承との二面から精査した資料に基づいたものである。されど師蛮が長母寺を探訪した時は、既に寂後三百六十年を経過して、記録伝承の隠滅も免れないところであり、殊に僧伝類に収載する記事は、簡要を尊ぶを以て、無住の伝も、応々誤解を招く記述がある。なお「考其述作中、以備今之撰」との注意が払われているが、いま無住の著作を検討するとき、幾多の補正すべき点が見出される。

(一)

「世間に見どころある古集物語多しと云へ共、近代の事を書き置く人も侍らざるにや。代の末に聞えざらん事もなごりなく覺え侍るままに、愚なる人の心をすすむるたよりにやとて、拙き詞をばからず是を集む」と述べる如く、無住は近代的な社会的美談俗語に多くの関心をよせ、庶民教化の素材、愚なる人の心に連る世俗的庶民的なる中に、高い思想を盛上げた教化論書が「沙石集」十卷である。「常に法門は珍翫し思惟すれば」大乘の法門は唯凡聖一如迷悟不二の仏教哲学の支致に達することを主張し、「手に任せて散々と書散し」た、仏教原理論書が「雜談集」十卷である。「順修善行專、逆修惡行、奔ヘシ」、「障道因縁除助道修行、思染ヘ」き様、「初心同法爲愚意、法門任手記」した、仏教実践論書「聖財集」三卷、「妻鏡」二卷を作つた。

かくの如き論書の基底をなすものは、禪師の所謂「私の愚推」、又は「愚意の法門」の語に表された、「愚」の自己反省的意識は当時の時代的思想運動^⑥につながるものである。

宗教的な内面的自己反省により、愚者の立場において直接庶民の生活につながりを持ち、特に地方民俗芸能を創始して、賤民の福祉に貢献した無住一円は、中世において特異な存在を示している。

無住の人間像を把握するためには、その生涯を数期に分けて考察することが便宜である。しかしその中、無住一人の精神史において、大きく時期を劃する史実は、聖一円の座下に得法したことである。依てそれ以後を教化時代とすれば、それ以前は求法修学の時代とも称せられる。禪師の人間像形成の上からは、前期にスポットを当てるとき、更に数期に区分せられて、出家以前、関東修学、関西求法の時代とすることが出来る。

禪師の出家以前については、「高僧伝」に

相州鎌倉縣人、梶原氏、其先世任源將軍、曉幼齡喪父、

依常州親族、十九投三州之山寺、薙髮真具^(弘全三二五)

とあつて、その出自と在俗時代について概言せられていゝ。禪師は「愚老述懷事」と題して、自叙伝体に過去を追想して

愚老ハ嘉祿二年丙戌十二月二十八日卯時産タル者也、先人カ夢ニ今夜此ノ里ニ生タル者ハ、大果報ノ者也ト云人有ケリ、然ルニ先祖鎌倉ノ右大将家ニ、召仕テ寵臣タリト云ヘトモ、運尽テ天亡シ了ンス、仍テ其ノ跡継事ナシ、十三歳ノ時、鎌倉ノ僧房ニ住シテ、十五歳ノ時下野ノ伯母カ許ヘ下リ、十六歳ノ時、常州ヘ行テ、親シキ人ニ被^レ養、十八歳ニシテ出家シ^(雑談集卷三)

と述べている。禪師は梶原景時の末裔であることは明瞭である。景時は頼朝の石橋山拳兵に參じて後信任を得、その後の武勳と義経を讒したことは世間周知の事実である。しかるに正治元年^(二九七)結城朝光を讒し、三浦義村、和田義盛等連署の訴状によつて、却て謀反人と断定せられた。

「吾妻鏡」卷一六、正治元年十二月十八日の条に

景時の事、諸人連署の状に就いて、日来連々沙汰を経られ、遂に今日鎌倉の中を追出さる。和田左衛門尉義盛、

三浦兵衛尉義村等之を奉行す、仍つて相模国一宮に下向す、其後彼の家屋を破却し、永福寺の僧房に寄附せられると云々(岩波文庫本 三・一九五)

とある。かくて鎌倉を追放せられた景時の其後の動靜について、翌二年正月廿日、原宗三郎の注進は、「梶原平三郎景時、此時当国一宮に於て、城墻を構へ、防戦の儀を備ふ。人以て恠を成すの処、去夜丑剋、子息等を相伴ひ、愉かに此所を遜れ出づ、是謀反を企てて、上洛するの聞有りと云々」とある。この注進によつて、幕府は追討軍を派遣し、景時同族団は駿河国狐崎において、応戦これ努めたが、遂に一族郎等三十三人は誅伐せられて、頼朝創業の功臣は世を去つたのである。当時景時には景季、景高、景茂、景国、景宗、景則、景連の七子があり、「玉葉」にはこの時景時、景茂は高橋において自害し、景季、景高等は討伐せられことを記している。しかるに「吾妻鏡」、「三浦系図」等によれば、同族すべて誅戮せられ、時に嫡子景季は三十九歳、景高は三十六歳、景茂は三十四歳であつた。

この梶原家一族失脚後、二十六年に誕生した無住は、この

景時の七子中の一人を祖父と仰ぐ家門に生れ、而も父は天亡せるため、禪師の不幸の第一歩が踏出されたのである。されども先人の見た「果報ノ者也」との夢告を、我が身の境遇と引合せて、実感として現証するのは、仏門に入り得道の精神的個人経験を得た後の、還相的宗教活動期に体認せられたものであつて、観念的思惟の結果到達した諦めでないため、特に先人の言が回想せられ、取出されている。これ法悦の中に、我が身の現在に荷負する全て「果—果報」が、先祖、先人乃至は落謝した個人の過去（因—不幸）の恩寵とし、高次の仏法の道理の觀念を通して、法爾必然的關係を自覺せしめる、鎌倉時代の道理の哲學的世界に連関をもつてゐる。

禪師が生を享けた所以のものは、景時の反逆に拘らず、幕府の処置は、直接彼の事件に加担した者のみに限定し、累を幼童婦女にまで及ぼさなかつたことによる。三浦系図によれば、七子中景茂は吉香小次郎に討取られたが、その家門は長く継承せられてゐる。更に「吾妻鏡」には

野三刑部丞 成綱の女 故梶原平次左衛門景高の妻 は、尼御台所の

宮女、御寵愛比類無し、且は女性たりと雖も、其仁たるに依りて、故將軍の御時、尾張國野間内海以下の所々を領し訖ると雖も、而も夫誅戮せらるるの後、一切隠居し頗る恐怖の思を成すと云々、仍つて其沙汰有り、領所等相違有る可からざるの旨、今日仰を蒙り、安堵せしむと云々

(岩波文庫本
三・二一一)

と領土安堵の仰せを蒙つてゐる。なお此より後十二年、建曆二年十一月二十一日、出家した荻野三郎景継について、

「吾妻鏡」には

荻野三郎景継、永福寺に於て出家を逐ぐ、梶原平次左衛門尉景高の子なり、景高誅伏の後、遺息等頗る沈淪す、而るに景継心操穩便を存するの間、召仕はるるの処、俄かに此事有り、是去夜御前に於て、誤つて常燈を滅す、恥辱と称して此の如しと云々、將軍家之を聞食さるるに就て、伊賀次郎を以て御使と為し、敢て以て憚る可き事に非ず、其科無きの上は、恥辱に処し難し、更に早く版參す可きの由、仰下さると雖も、御使に對面せず遂電すと云々、若し事の次を求むるかと云々

(岩波文庫本
四・五七七)

と記し、幕下に近侍していたことが知られる。その他梶原姓を名乗る者を、「吾妻鏡」について求むれば、建保元年(三三)五月、幕府襲撃の和田義盛に党した部將の中に、梶原六郎朝景、同次郎景衡、同三郎景盛、同七郎景氏等の名が列ねられて居り、又承久の乱(三三)において、宇治の合戦に軍功を立てた交名中に、梶原平左衛門太郎の名を見出すことが出来る。しかるに「愚管抄」には

景時国を出て京の方へ上りける道にてうたれにけり、子共一人だになく鎌倉の本体の武士梶原皆うせにけり

(巻四)

とあつて、景時の子息の殲滅記事は実状に即するが、家系の全滅は京都に風聞したところであつて、「吾妻鏡」に伝える「遺息等頗る沈淪」したと云う、逆境に彷徨した者は寧ろ景時の孫である。禪師は沈淪した父の天亡により「其ノ跡継事」なく、「愚老幼少ヨリ、親人ニ養レテ、父母ノ養育カツテナシ、棄子ノコトクナリシカトモ」(雜談集卷五)と云う、八十の老後の述懐は、恐らく一片の虚飾をも交えぬ真相を物語つたものである。天涯孤獨、親人間を転々居

を移し、幼年期を諸家に送つた禪師は、「十三歳ノ時、鎌倉ノ僧房ニ住シテ、十五歳ノ時下野ノ伯母カ許ヘ下リ、十六歳ノ時、常州ヘ行テ、親キ人ニ被_レ養_レ」れたと云う記憶は、禪師の生涯に消えることのなかつた、生活環境の轉換をなす、生活上の一結節である。

禪師の出家の動機については、何等語られていないが、恐らく法然に見るが如き「させる因縁もなく」して出家したものであつて、論理的必然的帰結、即ち禪師の所謂「運」の然らしめたところである。禪師が「八句ニ及テ、不_レ飢不_レ寒、随分ノ果報ナルヘシ、人ニ衣食乞フ事ナク、詔求ル事ナクシテ、今日マテ任_レ運送_ニ星霜_二了_一」とは、「棄子ノコトクナリシ」過去を前提とすれば、八十の現在を招致したごと自体、通途の思考を以てすれば奇蹟とせられるが、之れこそ出世間的果報とせられるもので、出家得道にその契機が見出される。武門を出自とする禪師は、執権の榮職にあつて、時めく北条氏とその果報を對比して

相州ノ禪門、累代ノ家ヲ継キ、果報威勢、国王大臣ニモ猶勝テ、万人仰_レ之、然ニ物々勝劣好悪ハ、境縁モ無_レ之

只ノ人ノ分別ノ情ノ上ニ仮ニ論_レ之、古人ノ云、境縁ニ無_レ好醜、々々ハ起_ニ於_ニ心_一云々、サレハ果報ノ善悪、人ノ情分別也、相對シテ論_レ之、彼ノ相州ニ勝_レテ、心ヲ遣ル事多_レ之、(雜談集卷三)

と述べる如く、妄分別を離れた眞の果報の發見は、出家を契機とする修行得道の宗教經驗によるものである。

(二)

無住の出家の年時については、「高僧伝」には「十九投_ニ州之山寺_一」とあり、「伝燈錄」は「常之山寺」といい、州が常州であることを明瞭にし、その年齢については「高僧伝」と同様、十九歳出家説である。しかるに「雜談集」卷三には、「十八ニシテ出家シ」と述べているので、寛元元年(三三三)、十八歳出家説を以て正当とすべきである。その後二年、寛元三年二十歳で師の譲りを受けて、寺門經營の衝に當ることとなつた。

即ち「少年、師匠讓_ニ片山院主_一、世事無_ニ正體_一故、再三辭退、

而レトモ子細有リテ譲リ了テ、世事丁寧ニ教訓、何事モ
相計テ被レ助侍キ

とある。これによつて禪師が入寺したのは片山所在の寺院であることは確定的であるが、これを法音寺とする説の当否は不明である。「世事無正体」と云う二十歳の青年僧に、主管の責に任ぜねばならぬ理由は、これ又不明であるが、地位についた禪師は、隠退した師匠の支援に、無量の恩愛を謝している。されど禪師の無欲恬淡、世事に拘泥せぬ禪門的風貌は天与の資性で、既にこの時「讒ナル什物其ノ數不知、我カ物人ノ物不見分、無ニ正體事、歷レ物如レ此、是レ道心故ニ非ズ、只世間無沙汰ニシテ」と述べている言の中に伺い知ることが出来る。

出家後の受学の師については、初めに「高僧伝」に「曉習ニ俱舎頌疏於幸圓僧都」とある。しかるに「雑談集」(巻三)には、「幼季ニ三井寺ノ円幸教王坊ノ法橋ニ、俱舎頌疏処々聞レ之」とあり、円幸については、「沙石集」巻五に常州の東城寺に円幸教王房の法橋とて、寺法師の学匠有りけり、他事なく正教に眼をさらし、頭密の行怠りなき

上人也、世間の事は無下に無沙汰也(岩波文庫本 上・二一六)

と述べ、学匠の世事に疎い逸話を載せているが、これ禪師直接の見聞とせられるであろう。「高僧伝」の「此時教門名徳大半在「東関」の言の如く、教界の碩学は何れも関東に教線を張つたので、禪師は次いで法身坊上人に支義を聴き、建長四年、(三五三)二十七歳、上野の世良田に赴いて、悲願長老に就て釈論の講を受けた。悲願長老については、「沙石集」巻十に

寿福寺の長老、悲願房阿闍梨朗普上人かの跡(釈円房律師榮朝上人)を継ぎて長老せらる。後には寿福寺の長老にて御坐しき。此れも智行共にならびなき上人にて、末代は有り難き智者と申し相ひき(岩波文庫本 下・一六四)

と智行兼備の名徳であることを讃じているが、建長寺の元庵普寧の、「日本には過分之智者也」との賞辞をも引用している。

前述の諸師について教を受けた年時については、異論の余地はないが、その後の修学について、「高僧伝」には二十七適ニ上之長樂寺、依ニ藏叟譽公、參禪之暇聽ニ釋論及

圓覺、證三年、二圓城實道法師、實ニ止觀之旨、又趨ニ南
京、持犯開遮盡得ニ其蘊(弘全 三三五)

とある。この朗著に參禪修學して二年後、實道について止
觀を聴き、南都に赴いたとの記事を、そのまま、継承した
ものが「高僧名著全集」第八卷の「無住禪師抄伝」であ
つて、「二年ほどで園城寺に行つて實道法師に謁して止觀
を聴き、また奈良に遊んで戒律を伝へ」とし、又同書の藤
村作博士の解説にも、「建長年間に園城寺で實道上人に止
觀を質し」とせられている。又岩波文庫「沙石集」卷下の末
尾の「無住年譜」には、二十九歳の時「三井實道上人に止觀
を聴く、又和州菩提山に法相を学び、かつ律を修む(雜・考)
この後五六年奈良に居りしもの如し」と一応「高僧伝」の
説を採つている。依つて「雜談集」の述懐によつて三十六歳
再び菩提山に上り、密教事相を伝えたとなして、「高僧傳」
説と「雜談集」説とを羅列している。「二十九歳、實道坊上
人ニ止觀聞之」とは禪師の言であるから、事實を否定する
ものではないが、その受學の場所が問題とせられる。「高
僧傳」が「園城實道法師」とすること、及び「又趨南京」

と続いて記すために、高僧伝説を承けたものは、園城寺に
赴き實道上人に謁し、また奈良に遊ぶと云う一連の史実と
なしたのである。又筑土氏の「無住年譜」に「三井實道上人」
とせられているが、これ単に園城を三井と置換えられたも
のか否か不明であるが、寧ろ實道上人の學統を三井寺門派
とし、「此時教門名徳太半在ニ東關」の指示の通り、當時關
東下向中の實道に受學したと解すべきである。「雜談集」卷
九の「常州ニ實道房ノ上人ト申シ、天台ノ學生ノ、止觀ノ
講ノ時云々」の文は園城實道法師に當るものであらう。「雜誌
集」卷三に「二十七歳ノ時、住房ヲ律院ニナシテ、二十八歳
ノ時、遁世ノ身ト成テ、律學六七年、本來定惠ノ學志侍シカ
ハ、三十五歳壽福寺ニ住シテ、悲願長老ノ下ニテ、釈論円
覺經講ヲ聞ク 釈論二十七歳世
良田ニテ聞之、坐禪ナト行シ侍リシカ、一年
マテモナクシテ、脚氣持病ニテ、坐禪心ニ不レ叶」とあるこ
とによつて、敢えて二十九歳建長六年以後、五六年の奈良
遊學の期間を設定する必要は認められない。此の間の消息
を知るよすがとしては、「二十八歳ノ時、遁世ノ身ト成テ、
律學六七年」とある如く、仏陀所制の仏教生活規範の研修

は、禪師を南山道宣の行業に導いた。即ち「律ノ中ニ南山大師ノ事有^レ之、昼学律、夜坐禪シ、智慧深ク御坐ケル事聞^レ之」き、賢を見て齊しからんとしたが、「夜ハ坐禪セシカトモ、脚氣ノ病体有^レ志無^レ功」と、病体意に任せぬ真実を告白している。されど「衣鉢等ハ以^レ律ヲ為^レ本、不^レ可^レ存^ス異儀^ニ者歟、心地ノ修行ハ止觀禪門尤モ是ヲ可^ニ信行^ス、五年学律ノ後可^レ學^ニ定惠^ヲ、是^レ本師ノ金言也」(雜談集卷三)とは、学律は僧院生活、僧尼の行事の基底を支えるものであることを強調し、依て学律五年後、「心地ノ修行」のため、再び朗蒼を寿福寺に訪れる必然性を論理付けている。

(三)

禪師の関西遊学を決意せしめた原因については、師自ら何等触れていないが、定惠を学せんとすることにあるのは明瞭であるが、結果から見て、真言事相の相承と東福寺開山聖一國師弁円に謁して、その教学を伝受した事が、大いにその生涯を決定しているのである。禪師自ら

其ノ後真言志有^テ、三十六歳菩提山ニ登^テ、如^レ形東寺

ノ三宝院ノ一流肝要伝ヘ了^ヌ」

と述べて居る如く、真言稟承を目的として関東を出発した。大和添上郡菩提山寺は、慈円の兄信円(一一二五三)の再興するところで、「勅伝」卷十一には、「菩提山の僧正信円」と名を出し、「高僧伝」卷十四には、「為^ニ和之菩提山、及内山第一祖」とある。^⑩この書に引くところの「興福寺別当次第」によれば、「貞応三年十一月十九日於菩提山入滅七十二」とある。この貞応三年(二三三)後、禪師が菩提山に上る弘長二年(二三三)までの三十八年間、菩提山の住侶については、杳として知られない。しかし「高僧伝」卷十六に、菩提山の唯空経照、^⑪本心澄海、^⑫禅空如性等の伝を載せている。唯空は「円照上人行状」によれば

唯空房経照、北洛人也、興福寺住僧、學^ニ法相宗、後厭^ニ世榮^ニ住^ニ戒坦院、暫移^ニ西大寺、受^ニ沙彌戒於叡尊上人、後還^ニ戒坦^ニ受^ニ比丘戒於圓照上人、厥後或住^ニ善法寺、或住^ニ金山院、住^ニ東福寺、修^ニ習禪法、乃彼開山圓禪師之時也、後住^ニ菩提山、爲^ニ唯觀上人真言上足付弟、爲^ニ衆所^レ推、即作^ニ一山灌頂大阿闍梨、拔群之德事甚巍々

(統々群書類從)
(三・四九四)

とあり、又如性については

禪空房如性、南京人也、本住興福寺、稟性敏利、亦有學業、後住菩提山、与經照上人一處□住、習學密教、教相義巧、隨智舜、學論宗法華義疏等、研尋不棄、立破縱橫、物難敵對、高野体日公者、菩提山之學頭也、性公難之、怙亂講匠之意、遣破之事如是等也(同上)とあり、澄海については

本心房澄海、北京人也、本長樂寺重代別當職、住延曆寺、即道西公之舍弟也、次住戒壇院、受戒學問、住東福寺爾禪師下、修練禪法、後住菩提山、研精秘教、事相教相、鑽仰溫習、智德難思、爲衆所推、門輩有數者也。

(同四九五)

とあつて、この資料によつて三師の菩提山入山の目的は、密教稟承にあることは明瞭であるが、その年時については明確を欠いている。しかし經照の受教の師である叡尊(二二〇一) 円照(二二七) 弁円(二二〇二)の事蹟について考察すれば、弁円の寂年即ち弘安三年を遡ることであり、正元元年(二五) 円照の金山院に移住して後のことと思われる。

即ち「円照上人行狀」に

正元元年己未之曆、四条垂相以洛東鷲尾法名号金山院寺院、

彼寺者、黃門家成卿草創建立之所也、(中略)寺經時代、殿

宇葺損、上人勸誘道俗、興復修造、施主寄進莊園、上人

自住興法、闡敷律部、弘通密教、照公住持彼寺二十有

九年、厥間施作佛寺、開敷法筵、修成行業、班宣化導、

遂於彼所報命終焉(續々群三)

(四八五)

とある。經照が善法、金山の諸寺を訪れたことは、受戒の師円照に面謁受教せんがためである。禪師の入山は弘長二年(二五三)で、円照の金山寺移住後三年に相当するので、經照の入山は禪師の入山とは、時を隔てるものではないことが知られる。もし此の説が可能であれば、經照と共に割席同學した如性について、前掲の事蹟につづき、「殊照、如性、居住一雙受戒、亦同坦、乃正元々年三月二十三日也」と記載せられているが、之れは受戒の日時を明記したものであつて、「高僧伝」卷十五には「正元元年、性謁円照于戒壇院、受戒聽律、不詳其後」とあつて、正元元年菩提山を出て、戒壇院で受戒後、その消息を絶つたこと

になる。この説によれば「与_二經照上人_一處□住習_二學密教_一」は成立せぬことになる。即ち唯空經照の伝記と合致せないことになるからである。又如性が三論を受けた智舜については、^⑤「高僧伝」に正嘉元年知足院において中論、文永六年戒坦院において、三論を講じたことを伝えているから、如性の時代を傍証する一資料となる。

此等の諸師は唯観について、密教の相承を以て目的として菩提山に入つたが、当時唯観上人は三宝院派の密匠として名声高く、多くの学侶が上人のもとに蟬集したことは、唯空を「為_二唯観上人真言上足付弟_一」の文字、及び高野より来つて菩提山の学頭となつた体日の、開講惑乱のこと等から推知せられる。又澄海は衆に推されて主職となり、門輩大いに榮えたので、菩提山の伝統はこの時茲に培われたのである。

唯観については何等伝えられていないが、禪師の菩提山修学中の同侶と考えられる経照は、「興福寺住僧、学法相宗」とあり、禅空房如性も「本住興福寺、稟性敏利、亦有学業」と記され、共に法相の教学に達していた。故に禪師

は「於_二菩提山_一法相法門要處少聞之」(雑談集卷三)と述べていることによつて、唯空、禅空と同席居住したことは疑えぬところである。しかるに無住の関西遊学の意義は東福寺に掛錫し、弁円に就いたことにより、「問_二經論奧義_一、服_二其資深_一、就_二弟子列_一、遂受_二禪要_一」(仏_一二三五)けた一事に見出されるが、同時に名山靈地を巡拝したことにもある。述懐して「洛陽諸国ノ処処ノ名所、靈寺靈社、山門南都ノ七大寺、コトニハ南浮第一ノ仏ト聞ル大仏、日本第一ノ大靈驗熊野、生身仏ノ如ク思エル善光寺、大師御入定ノ高野、上宮太子ノ御建立、仏法最初ノ四天王寺、並ニ彼ノ御誕生ノ橘寺、御建立法隆寺御廟窟、如_レ此靈所思フサマニ_レ拜_レ之、人間ノ思出ナレハ、是ヲコソ果報ノ目出タキトハ申シツヘケレ」(雑談集卷三)とあり、足跡広く各地に及んだことが知られる。

次いで無住は東福寺開山弁円について教を受けたことについて

其_レ後東福寺ノ開山ノ下ニ詣シニ、天台ノ灌頂谷ノ合行秘密灌頂、事ノ次ニ伝了、大日經義釈、永嘉集、菩提心

論、肝要ノ録ナト聞了ヌ(雜談集卷三)

とある。所謂菩提山を出て、東福掛錫の時期については明記せられていない。「高僧伝」には「居ニ菩提山ニ五載、遡ニ徇密水、傍通ニ法相玄致、凡當時講說之場莫レ不ニ經歷ニ」とあるが、禪師が長母寺を重したのは後に述べる如く、弘長三年三十八歳の時と考えられるから、東福寺の門を叩いたのは、弁円が弘長元年、普寧の建長寺普童を賀する為め、鎌倉に赴き帰洛した後のことと推定せられる。

弁円に受けたところは、天台灌頂谷の合行秘密灌頂は、事のついでに相伝したと禪師自身語るところであつて、

大日經義釈、永嘉集、菩提心論、肝要ノ録ナト聞了、本來疎略愚鈍晩學ノ故、何ノ宗モ不レ得、其旨、只大綱聞之、顯密禪教ノ大綱、銘ニ心肝ニ薰ニ識藏、併開山ノ恩徳也

(雜談集卷三)

こそ禪師の求めたものであり、与えられた最大の結果であつた。禪師が顯密禪教の大綱を得て、これ等の諸教ただ一身にあつて、別宗別行の法とせず、所學所行、此等を包摂貫括して練練する、真學の者に導いたのは、実に弁円の染薫に

よる結果である。されど退いて師の教誡を沈思反芻する

時、「宗鏡退披覽、開山ノ風情、宗鏡録ノ意也、仍テ処々思ヒ合セ侍リ、師匠ノ恩徳経レ生難レ忘」と、前文に続いて述べ、弁円の思想の淵叢に到達することが出来、活眼を開くことを得た。即ち弁円に謁することにより得た大果の一は、諸教和會思想の伝承である。即宗鏡録について「宗鏡録禪教和會無ニ偏執、故多年愛」(雜談集卷二)と云えることにより伺い知ることが出来る。即ち「沙石集」には

東福寺の長老聖一和尚の法門談議の座の末に、そのかみ臨みて、時々聽聞する事侍りしに、顯密禪教の大綱誠に目出く聞え侍りき、その旨を得ずと云へども、意の及ぶ所の義門、心肝に染みて貴く覺え侍りき。恨むらくは晩歳にあひて、久しく座下にあらざる事情しかれども、仏法の大意能々慈訓をかぶり侍りき(岩波文庫本上・一五一)

とある。その二は、既に律を学び、止觀を學し、重ねて「三十五歳、寿福寺ノ悲願長老ノ下ニ、自レ春至レ秋、叢林ノ作法行レ之、律儀守レ之」る身となり、今更に東福ノ開山ノ座下ニシテ、禪門ノ録義釈等聞レ之、依レ之、

如^レ形^三學齊^ク修^レ之(雜談集卷三)

と述べる如く、三學円備の志は予て抱いたところであるが、その樂願は達成して、禪教律の三は一身に備わつたことである。

されど禪師は既に二十七歳と三十五歳の兩度、悲願長老朗普に就き學び「坐禪ナト行シ侍リシカ、一年マテモナクシテ脚氣持病ニテ、坐禪心ニ不^レ叶」と廢捨している。しかるに今嘗て朗普と同門であつた、弁円の門弟の列に加わり、受法したことには如何なる原因があるであらうか。榮西の台密禪三宗兼學の主張は、榮朝、朗普と伝承せられているところであるが、禪師の三學円備の思想は、關西求法、とりわけ弁円に參ずることにより、確信にまで高められた。建長三年弁円について禪學修証した円照は、常に門徒を訓えて

身住^ニ仏戒、口作^ニ仏語、意住^ニ仏心、念々^ニ如是、念々^ニ如来

如說而行、如說而說、攝^ニ持威儀、名爲^ニ戒學毗奈耶藏、是故學知名^三之律師、通^ニ悟性相一名爲^ニ慧學阿毘達摩、所以精

詳名^ニ之法師、直指^ニ己性一名爲^ニ定學素多覽藏、是故成立

名^ニ之禪師(円照上人行狀上)

(統々群四八一)

といい、これ等を兼ねざるものは眞の仏子に非ずとなしてゐる。円照の諸教融會説の依つて培われた根元は、宗密禪師の「禪源諸詮都序」にある。「行狀」には「宗密禪師作^ニ禪源諸詮都序二卷、照公^レ觀^レ之、晝夜研覈自写(統々群三)持之(四八二)」とあり、又「禪源詮中以^ニ教三宗^ニ對^ニ禪三宗、意謂得^レ旨、常弘^ニ此義^ニ」とあつて、弁円、円照、無任の三師共に、融合説の基本的理念として、宗密の「禪源諸詮都序」を尊貴することは、寧ろ弁円に則るものと云わなければならぬ。

禪師は性來病弱であつたことは、「自^ニ幼少^ニ、病體氣力形儀ヨハクシテ」(雜談集卷六)と云い、三十五才以後もなお多病であつたことは、弁円の座下を去つて後

如^レ形^三學齊^ク修^レ之志有^レ之、然ルニ病體、心懈怠、有^レ學無^レ行、但、如^ニ病導師、同法ヲ教訓呵責ス、然ルニ不法ノ仁ハ多ク、如說ノ僧ハ少シ、此ノ事凡夫ノ力不^レ可^レ及、然ルニ或ハ親類ノ僧、同法不法ハ、愚老カ無^レ教訓、無^ニ正體一故カト思^テ譏^レ之(雜談集卷三)

と述べ、三學の上に於いて有學無行を内面的に反省し、その原因を病體の故となしてゐる。かくて修學の志を達成せ

られた禪師の、常に反覆せられた述懐は「本来疎略愚鈍晚学ノ故何ノ宗モ不レ得_レ其ノ旨、只大綱聞_レ之」である。しかし晩学の意は、「無住禪師抄伝」に云うが如く、「法然上人が八才から経を学び、白隠禪師が七歳で提婆品の講義を聴いたりしたというのから比べると、十八才での出家は早かつたとは言はれない」(五五九頁)との、十八才出家即晩学の皮相の見解は、精修勤学の禪師の場合には当たらない。本来疎略愚鈍は謙辞としても、本質的には師弁田と対座したとき、自然心底から湧出た実感である。又晩学の意味するところは、弁田の門を叫くことの遅かつたことを憾む得法後の所感である。故に「顯密禪教大綱、銘_レニ心肝_ニ薰_ニ識藏_ニ」_一ずる示教を、「併_レ開山ノ恩徳也」と謝せざるを得ない。世にたやすく肝に銘じ識に薰ずるが如き能化及び所化の、教育的宗教的交款が存在するであろうか。この師に遭うことにより、世俗的晩学の意は解消し、その遅きことを憾んで、晩学の感は切実に復活して来る。即ち「沙石集」卷三に

故東福寺の長老、聖一和尚の法門談議の座のすえに、そのかみのぞみて、時々聴聞する事侍りしに、顯密禪教の

大綱誠にめでたく聞え侍りき。その旨をえずといへども、意の及ぶ所の義門、心肝に染みてたつとくおぼえ侍りき。恨むらくは晩歳にあひて、久しく座下にあらざる事を、しかれども仏法の大意能々慈訓をかふり侍りき
(岩波文庫本
上・一五一)

とあるのは、此れを証するに足るものである。

(四)

無住が尾州山田郡木賀崎(名古屋市東区矢田町)長母寺に住するに至つたのは、弘長三年(二三三)三十八才と推定せられるのは、「雑談集」卷三に

当寺ニ因縁有ル故へ歟、相通_レフコト四十二年、無縁ノ寺常ニ絶_レ煙、衣鉢道具之外無_ニ資財_ニ蓄_ニ世間ノ人ノ心_ニへ、非人ノ如ク思ヒ合

と云う、無欲恬淡の耐乏状況と、四十三年を、同書末尾の「于時嘉元三年乙巳七月十八日於尾州山田郡長母寺西庵金剛幢院草了 東寺末流金剛仏子道隣(俗年八十才僧臘六十 二房号一円道号無住)の成立年時、俗年から逆算して得られる結果である。

長母寺は山田次郎源重忠の開基であつて、山田重忠に就いては、「沙石集」巻六に

尾州に、山田次郎源の重忠と云ひしは、承久の時、君の御方に打たれし人也、弓箭の道人にゆるされ、心もたけく器量も人にすぐれたるものから、心もやさしくして、民の煩ひを思知り、よろづ優なる人なりけり(岩波文庫本 上・二九三)と、その為人について述べるところがある。「承久記」には、「墨俣へは河内判官秀澄、山田次郎重忠、一千騎にて向ひける。東国の兵雲霞の如くつづきければ、暫く戦ふてぞ山田次郎颯と落行きけり」と戦況を伝えている。

寺伝によれば、治承三年(二七)の創建、開山は僧觀勝とある。禪師の入山する当時、長母寺が地方における宗教活動の中枢機能をなしていたことは、「関東往還記」の(弘長二年)二月七日の条に、叡尊は近江国鏡宿において、常陸国三村寺僧道篋比丘の書状を受領したが、その内容は

尾張国長母寺新發意僧卅余人、始欲行律法、兩三日有逗留、可被遂結界之由載之(叡尊伝記 全集七〇)

であつて、この届請に応じた叡尊は、美濃路を過ぎ、九日

尾張国洲跨河の西岸に到り、長母寺僧兩人の迎えを受け、

十日折戸宿より北に道をとり、夜長母寺に入った。同書に

常住僧等先謁定舜、今暫有逗留可被教導初發心之衆等之由懇切所望、定舜以此趣啓長老、并傳説卅餘人發心之由來、當寺院主良圓者山田次郎息、号侍從阿闍梨、相傳師跡管領當寺之間、領地數多、財産不之、而當寺住侶一兩輩宿縁相催歇之間、一夏之程止住西大寺、見僧侶之修行、聞佛法之正理、還當寺對良圓粗語西大寺修行之様、良圓遙傳聞此由忽成發露之思、欲趣如說之道、即以寺院擬十方僧之依所、以資財宛十方僧之通食、如此令結構之間、年來止住之僧侶卅餘人、不慮同心、捨資財、離所愛、着法衣、行長齋云云、長老聞事之次第、太以感氣(同上)と記されている。定舜の叡尊長老への言上は、長老招請の縁由を物語るものである。

長老の滞留講経期間は、十一日より五日間で、「從今日二至三十五日、可講梵網十重之由被約諾」れて、直ちに哺時(申刻)から釈迦堂において、道俗の聴衆のために講経せられ、十二日は貴賤の來集多く、釈迦堂より本堂に

席を移して講經された。この期間中、十四日朝本堂において四分布薩を行じ、夜は常住僧三十三人、在家百九十七人に菩薩戒を授けられた。十五日には涅槃講、布薩、舍利講が営まれたが、その状について、

中食之後、於本堂行涅槃講、聽衆雲集、充滿寺中本堂猶

難容受之間、於露地行梵網布薩說戒、長老、辦事衆四十九人、

結緣衆三千七十七人、入夜於本堂行舍利講、山田次郎入

道良円 進小袖一領

と述べられている。此等の「關東往還記」の文は、二三の問題を解決する鍵を提供するものである。即ちその一は、無住の來住する前年、長母寺には山田重忠の孫、侍從阿闍梨良円が住していたことである。重忠は「承久兵乱記」巻下に

山たの次郎しけたたは、にし山にいりて、さはのはたにほんそんをかけ、ねんふつしけるところに、あまのさゑもんをしよせければ、しかいすへきひまなかりけるに、ちやくしいつのかみしけつき、ささゑつつ、此まに御しかい候へといひければ、やまたはしかいして、ふし

にけり、いつのかみはいけとられぬ(統群書類從 二〇・一〇三)

とあつて、重忠は承久三年(三三)六月十五日、嫡子伊豆守の防戦するうちに自害した。よつて長老に小袖一領を布施した次郎は、重忠の次子に當る。その二は長母寺は京方に加担する地方武士の開基にかかり、「領地數多、財産不乏」とあり、又禪師自ら寺領十町の固定資産のあることを記し、本堂、釈迦堂、宿房持仏堂等の堂宇臺を並べた巨刹であることが知られる。しかるに良円在住時代になり、住侶中の一両輩の、西大寺一夏止住中の見聞を聴き、叡尊の行徳に随喜した良円は、自己の所住の寺院を改めて、一即以寺院擬十方僧依所、以資材宛十方僧之通食」たのである。かくの如く、かねて私淑する叡尊の關東下向は、良円にとり逸することの出来ない好機であつた。先きに良円によつて改められた長母寺の伝統は、無住によつてよく活されて

いる
殊ニ朝夕無用ニ心ニ無縁ノ寺、一物モ不レ畜、盜賊ノ恐ナシ、先季強盜寺ニ入テ、土蔵打破テ、物有ト聞タレハ、犬ノ尿ダニモナカリケルトテ、腹立テ去了ヌ、其後ウト

ミテ入事ナシ、門不_レ閉鈎不_レ懸、安穩ニ起臥シ第一ノ快
樂也（雜談集卷三）

とあるが、これは長母寺の無担無縁、又は荒廢を意味する
ものでないことは、「關東住還記」の文と併せ考える時、自
ら明瞭である。無住が求めて清貧の境を甘受したのは、「道

ヲ学セムト思ハハ、貧ヲ学セヨト云ヘリ、仏法ニ志アラム
人、ワサトモ貧ナルヘン、是便宜ヲ得タル幸也」と云える
如く、貧こそ仏道修行の起点とし、「当寺ノ作法、常ニ絶_レ
煙、夏ハ麦飯粥ナトニテ、命ヲツキ侍」る生活に、道を学
する媒介として果報が感得せられている。「律ノ中ニ出家
ノ貴キ事ヲ云ヘルニハ、田宅ヲ不_レ畜、四海ヲ為_レ家、百姓
ノ門ニ立テ行_レ頭陀、無_レ尽ノ食アリトテ、恩ニモアラス、只
彼ヲ福セシメンカタメ也、サレハ国郡ヲ知行スルハ国王ノ
恩也、出家ハ国王モ臣トシ給ハス、父母モ子トセス」と、
出家の本来の意義を自覚し、「如_レ此思ヘハ、所知モ広ク種
姓モ高シ、イカカコレヲ悦バサラム、先祖天亡ノ事ナクハ、
如_レ形所領ヲモ知行シテ、公家奉公センニハ、如此_レ仏法ニ熏
修ノ事有哉」と、宿命を超克し、宿命に恩寵を感得し、逆

境を契機として無上道を志求する、現在に無上の悦楽を享
受している。

禪師は長母寺に住して、子弟の養育と地方の教化に従
ひ、著作と貧賤農民の更生策として地方民芸の發達を計つ
た。

その著作としては、「書目集覽」所載の「寛文書籍目
録」には

妻鏡 一冊

沙石集 十冊

同仮名 十冊

雜談集 五冊

聖財集 三冊

を載せ、広く印行流布せられたが、その他「念仏諸經要文集」
一卷の著作ありとせられているが、「寛文書籍目録」に名
を列ねないところから、書写相伝えられたため、早く散逸
したものであるまいか、但し文雄の「蓮門類聚經録」巻
下に、その名を載せているが、当時存在したか否かは疑わ
しい。晩年伊勢桑名蓮華寺を往復し、雜談集、聖財集の著

作と推敲に力を用い、正和元年(三三)、一沔浮海八十七年、風休浪静依旧湛然の一偈を遺して、長母寺において入寂した。

(五)

禪師の長母寺移住後における、宗教活動と宗教体験については、その前半生に於いて形成せられた、宗教思想体系によつて誘発せられる、実践を中軸とする自転による周辺浄化の教化活動にあつた。これについて禪師自ら物語るところはないが、禪師が民衆の外側にいる人でなく、民衆の内側に没入して、民衆教化に努めたことは、取立てゝ伝記に載せぬ点が雄弁に物語っている。又「沙石集」は長母寺在住二十年、即ち五十八歳の時草せられ、「聖財集」は七十四歳、「妻鏡」は七十五歳、「雑談集」の成立は八十歳の年とせられる。よつてこれ等の諸書に表わされるところは、禪師一代の実踐の結実であり、修学の要訣である。従つて禪師を取巻く遊星的縑素の、公転的受益が成立したことは当然である。故に晩年出家、一文不通なれど、宋に

渡り徑山無準和尚の下に、九年常坐得悟した松島法心上人について

眞実の悟入の処は、文字をしらぬにもよらざるべし。末代なりとも、たのみあるは大乗の修行なり。只道に志ありて名聞利養の心なく、多聞広学のいとまをやめて、眞の善知識の辺にて、信心誠ありて身命すて、寢食を忘れて行住坐臥に怠らずば、大事を發明せん事疑あるべからず(沙石集卷一〇
岩波本下・一六六)

と述べているが、眞実の悟入には、「眞の善知識」が依怙とせられるが、この時、この地においては、禪師自らが依怙とせられた。

禪師の日本仏教思想史上に占める地位は、諸教融合会行の体系構成にあるが、その特色とする点は、民族宗教としての神道をも包含し、儒教思想をも包摂したことにある。そして仏道修行の根本道法中、基底的理念である戒律の実踐を強調することは、仏教本来の眞実義の探求を目的とする。即ち

夫れ戒律は釈子の威儀、毘尼は仏法の寿命也。正法を興

隆する軌則、皆律藏の中より出でたり。諸宗の妙解の後、妙行を立つるには必ず律儀による(沙石集卷四 岩波本上・一六五)と云い、戒律実修を強調すれども

戒急なりとも止観定慧の修因無くば、人天の善処に生じて、仏道に入りがたかるべし(同上 岩波本上・二〇三)と。三学の真実の体は無二なれど、体験実践上は漸次進入の次第を立て、

戒によりて定を得、定によりて智慧を得るは仏法の通相、修行の漸次也(沙石集卷五 岩波本上・二〇四)

と、仏意の実修に存することを明確に示している。飽く迄仏道の実修を根本とする禅師は

一代の聖教は、仏意みな生死を解脱せんためなり。道人のみるには皆出離の門也。説経師がみるには皆説経書也。まして聖教はみな論議にこそ侍りけめ(沙石集卷五 岩波本上・二〇二)

(二二)と述べているが、道人を以て己れが分とすることは云うまでもない。

禅師は実践門において、諸教の主体性を肯定し、而も行

人の共通的修道の本意を示し、

凡そ教門の大小権実は一往の義門也。能化の意にのぞめ実証の所をいふには、一理平等の無為の上の差別也。実には高下なし。行人においては、何の教門も只よく行じて、執心妄念なき是本意也(同上 卷四 岩波本上・一九七)

と云い、又

いづれの仏法も内に染著なく、外に邪業なき通相なり。真言念仏禅門等の、行業の精進といへるは、いささかも妄念雜はり起らぬ時を云ふなり(同上 卷六 岩波本上・二七八)とする。

しからは禅師によつて自信教人信せしめられた行業の精進のとは、それが如何に三業の上に表顯せられたかと云うに、「妻鏡」に

止悪修善心を地として、此の上に此の度正しく生死を離れ、菩提を証し、有緑の行を立つべし。その行は、悟入門には、心地修行、口称念仏也(高僧名著・五二七)

とある。心地修行と口称念仏の二行は、多聞広学を選ばず、有智無智を論ぜず、信心堅固にして行ずれば、生死を

離れ菩提に至ることを得るのである。その心地修行とは四家大乘及び禪門に勉むる修行を云う。「念仏も行業の久近を問はず、是非の機にいろはずして、唯今称名の一念即ち是別願所成弥陀の身土也、然れば申す時は即ち往生也。申さざる時は不往生也。罪人也」と説き、この三について

身口意の三業の中、上の心地修行は意業、称名念仏は口業、律を守り威儀を正しうするは身業也

と述べ、禪・念仏・戒律の実踐が、禪師の三業により一身に統撰せられている。されど同書には、これに次いで

此の外に真言密教とて、大日法身、三世常恒、自受法楽の説あり。……此の法是諸宗の最頂、萬法の惣体、生仏

一如の根本、事理俱秘密法也、舌相の言語は皆是真言、

身相の挙動は皆是密印、所有の心相は自ら三摩地と云へ

り。此の意を能く悟り顯すを真言の秘觀とす(五二九)

と述べ、この真言密教を以て速疾神通乗と判じ、「希に人身を受け、適ま仏教に値ふて修行せば、同じくは此の法を行業して、直に即身成仏の位に叶ふべし」と、真言密教を以て最上乘となす。よつて禪師の宗教思想の構造上、真言

の占める地位を知ることが出来る。こゝにおいて再び「高僧伝」の文を見るに、

文永初、尾州木賀崎郡長母寺、禪教兼弘、圓性篤誠、靈異尤夥、熱田明神屢入室問法、賜以般若全函、一時久旱、邑人請曉法零、三日之後雷雨大沾、藤相國崇其道行、下鈞帖董東福、三請殷勤、曉固拒不受

(仏全三二五)

とあつて、其の教化、靈異、徳善について述べている。その根底をなす「円性篤誠」とは、内面的実質的に追求した宗教的体験の必然的所産である。

(六)

上来禪師の教化活動の「禪教兼弘」の源流をなす、禪師の思想体系の形成と構造について述べるところがあつたので、正和元年(一一三二)その八十七年の生涯を閉じるに至る間の、鎌倉仏教興隆運動者の動向について概観すれば、北京律の再興者俊祐、念仏運動者隆寛の入寂は誕生の翌年であり、道元の帰朝は又その翌年に当る。梅尾高辨の

入寂は七歳、唱導を以て世を風靡した聖覚は十歳、浄土宗の辨長、源智は十三歳の時に世を去つてゐる。十四歳の時一遍智真は生れ、この年日蓮は出家し、その翌年凝然出誕した。十六歳の年、律の円晴、禅の行勇は入寂し、辨円及び浄業は帰朝して、大いに教を布き、栄西の弟子釈円房栄朝、浄土門の證空、幸西の示寂は二十二歳の年に当り、生駒良遍、洞門の祖道元は、その二十七、八歳の時入滅した。浄業の入滅は三十四歳に当り、親鸞の示寂は長母寺入寺の前年に当る。その後三論の真空は四十三歳、日蓮の佐渡配流は四十六歳、律の円照は五十二歳、辨円は五十五歳、関東に浄土宗義を顕揚した良忠は六十二歳、智真は六十四歳の時示寂した。尊叡の入寂は六十五歳であり、その翌年に聖守が、更に七十八歳の時忍性が入滅してゐる。この教界の龍象の示寂はその活躍年代を示すものであり、従つて禅師が面授示教せられなかつた諸師の思想・宗教は、何等かの経路を経て伝えられていたものと思われ、又無住と思想を等しうする入師の輩出も、当時の仏教思潮によるものは云え、自ら禅師の宗教思想形成史上における系譜、又は

その世代における共感を聞くことが出来る。その二三を挙げて、禅師の生涯、思想管見の終結としたい。

禅師の深く傾倒せられたところは、聖一國師辨円であることは云うまでもない。辨円は夙に実修に志したことについては、

師二十二歳、歸園城寺^一、一日自思、以爲我比年學大乘^二、小乘^一、究權實教^二、但増知解而已、於生死大事^一、何益之有、吾聞野州長樂寺、有榮朝者^一、房^{釋圓}、非管傳^三持三部密法^一、而亦受禪戒^一、聽教外別傳之道^一、知識匪遙、何滯此邪、乃出園城^一、赴野州^一、就朝扣其所^一、蘊

(聖一國師年譜)
(仏全一三〇)

とあつて、飽迄生死の大事に思いを馳せ、榮朝の門に入つた経過は、その思想の継承者無住が、その宗々の行門の実修を強調するところによつて、看取することが出来る。辨円の師事した榮朝は榮西の門に出で、榮朝の弟子朗誓について無住は教を受けたので、無住は辨円の融会思想を継承する以前に、榮西の台密禅三宗兼行の思想系譜につらなるものである。

無住が仏教の本意を探求把握する方途として、三学円備の仏教の基本原則と、三業の実践による体認の主張は、高辨の

末世の衆生仏法の本意を忘れて、只法師の貴は光るなり、飛なり、穀を断なり、衣を着さるなり又学生なり、真言師なりとのみ好て更に宗と貴むべき仏心を極め悟る事を不_レ辨なり(梶尾明恵上人伝記 国文東方仏教叢書・三〇〇)

との、妥協的形式主義的の仏教、咒術祈禱主義的儀礼仏教に対する警策は、内面的実質的に宗教的体験を求めんとする、宗教者に共通する發言である。無住が菩提心緊張感の連続維持の契機として清貧を棄んだことは、泰時の寺領寄進を拒否した高辨の言辭に通じている。

無住の生活態度は前記によつて推測せられるが、長母寺に止住して、「藤相國崇_ニ其道行_一、下_ニ鈞帖_ニ董_ニ東福_一、三請殷勤、曉固拒_レ不_レ受_ル」の信念は、道元の「從_レ今盡未來際、永平老漢恒在_ニ人間_一、晝夜不_レ離_ニ當山之境_一、雖_レ蒙_ニ國王宣命_一、亦誓不_レ出_ニ當山_一、其意如何、唯_レ欲_ニ晝夜無間精進經行績功累德_一故也(道元禪師行狀建擧記 仏全・四〇三)」に通通するところ

がある。又所学の法門が一身に統攝せられる、理念の類型を円照に求めてみるに、

照公一期所學、諸宗法門一身所持、涯限難_レ測、雖_レ學_ニ諸宗_一非_レ無_ニ可_レ存_一、諸宗之中、義理深奧悟達速疾無_レ過_ニ眞言_一、弘法大師所判炳焉、信心淳重歸投無_レ貳、(中略)雖_レ然隨_レ機導_レ人不_レ簡_ニ彼此_一、隨_レ遇即訓、無_レ論_ニ空有_一者也、雷是自己內證專以_ニ三密_一而已、身居_ニ律家_一、宗居_ニ三論_一、證味_ニ眞言_一、報遊_ニ安養_一、照公佛法事古是也(統々群 三・四八三)

の中、宗の固有名詞を置換えれば、も当時の真摯な求道者のつ公理であり地底の歛脈であつた。

以上を要するに、無住は鎌倉仏教界における新興、復興の諸宗教の特質を吸収し、合揉統一し、仏教思想史上、内典外典、神明仏陀の關係を論じて、儒道仏の権実二智、和光同塵の本意を明確に論述し、後世本地垂迹思想盛行の根幹をなしたことは特筆すべきことである。

註① 「沙石集」卷十(岩波文庫本下・一六八)

② 雑談集卷十

③ 聖財集卷下

④ 村山修一「鎌倉時代の庶民生活」一一三頁

⑤ 吾妻鏡卷十六（岩波文庫本三・一八九）

⑥ 景時一族と追討軍との合戦の状況報告には、「正治二年正月廿日、駿河国に於て、景時父子同家子郎等等を追討する事

一、廬原小次郎、最前に之を追ひ責め、梶原六郎、同八郎を討取る、

一、飯田五郎の手に、二人を討取る、景茂の郎等

一、吉香小次郎 三郎兵衛尉景茂を討取る。手討

一、渋谷次郎の手に、梶原平三の家子四人を討取る。

一、矢部平次の手に、源太左衛門尉、平二左衛門尉、狩野兵衛尉、已上三人を討取る。

一、矢部小次郎 平三を討取る。

一、三沢小次郎 平三武者を討取る。

一、船越三郎 家子一人を討取る。

一、大内小次郎 郎等一人を討取る。

一、工藤八の手に、工藤六、梶原九郎を討取る。

正月廿一日（岩波文庫本三・一九九）

⑦ 玉葉、正治二年正月廿九日、「或人云、梶原景時企上洛、

於駿河国高橋、自鎌倉二京方へ五、為上下向武士、

併土人等二被伐取了、景晴、景茂自殺、景季、景高等

被討伐一畢云々、於法勝寺領古橋庄内、有此事云々、

⑧ 但不知実説、可尋問國書刊行会（本三・九四〇）

統群書類従第六輯上、九

⑩ 「高僧名著全集」卷八、藤村作博士の解説に、「寛元元年に常州法音寺に於て仏門に入つた」（五三五）

⑪ 本朝高僧伝卷十四（仏全・二二一）

⑫ 同 上十六（仏全・二五一）

⑬ 同 上

⑭ 同 上卷十五（仏・全二三二）

⑮ 同 同上（仏全・二三〇）